

三宮の起業プラザにあるオフィスに、関西大学から台湾と中国の留学生がインターンシップに訪れていた

おいしい絵文字で世界をつなぐ



Case Study

アイデアを話すことで生まれる人との縁が起業の推進力になる

「どの国の人が日本に来てても安心して食事ができる環境を作りたい」。菊池信孝さんが絵文字(ピクトグラム)による食材表示ツールと研修セミナーを提供する会社を立ち上げたのは、学生時代の失敗がきっかけでした。日本食を食べたいサウジアラビアの留学生3人を寿司や蕎麦の店に案内したけれど、イスラム教徒は豚肉や酒を使った料理は口にできません。何が入っているかわからないと断念され、ファストフードのフィッシュバーガーで残念な会になりました。

大学では紛争解決平和構築や途上国開発を専攻。身近にいた留学生を通じて言葉・制度・理解の3つの壁の存在に気づき、サークル活動をスタート。1歳年下の後輩、留学生に日本語を教えるひと回り年上の教師との3人で、宗教上の理由で皆と同じ給食が食べられない子がいる小学校でのゲスト授業、学園祭でイスラム教の方でも



パッケージ需要も増えてきた。赤い斜線を引くと「その原材料が含まれない」意味になる

食べることのできる、「ハラール」唐揚げ販売など約20のプロジェクトを試したそうです。フードピクトもその1つで、NPO法人EDGEが主催した学生・若者対象のソーシャルビジネスコンペで優勝。「コンペの期間中メンターについてくれたのがダイバーシティ研究所の田村太郎さんと大阪ボランティア協会の永井美佳さん。新卒時に『副業していいからうちに来い』と誘ってくれた広告代理店の役員とも出会えた」と言います。

多様な団体が集まる神戸はビジネスにも子育てにもいい

1年余り会社に勤め、2010年横浜のAPEC首脳会議でフードピクトが採用されたのを機に大阪でNPO法人を立ち上げ独立。翌年にはアジア陸上競技選手権兵庫・神戸大会、第2ターミナルビル開業で海外のLCC就航が増えた関西国際空港でも採用され認知度アップ。独立後に経営を学んだのはNPO法人ISLの「社会イノベーター公志園」でした。

ひょうご産業活性化センターの勧めで応募した県の「クリエイティブ起業創出コンテスト」で採択され、17年1月に

兵庫県で本格的に事業展開。インバウンドの食事対応の1ツールとして食物アレルギーやベジタリアン、宗教上の理由で食べられないものがある顧客と、言語や文化の違いを超えたコミュニケーションを進めています。その年に経産省の「関西インバウンド大賞」特別賞を受賞。神戸を本拠地にしたのは「北野の神戸モスクコミュニティやユダヤ教の団体など、教えを請うべき多様な団体があることが第一。神戸出身の妻と結婚し子どもが生まれたこともあり、生活や子育てにもいいと考えたから」。いまフードピクトは国内100社1500店舗で常時使われ、週1回以上出張もするが「アクセスの良い神戸空港や新神戸駅から全国どこへでも行けるので便利」といいます。「オリンピックが決まって2015年から一気に競合も増えたが、世界に発信する好機なので英語、中国語、台湾語、インドネシア語のサイトを用意してSNSを利用した認知向上キャンペーンも行っています」

起業したい人へのアドバイスは「解決したい課題やアイデアに気づいたら言葉にして話してみる。一緒に取り組んでくれる仲間が見つかるかもしれないし、世代や分野の違う人から有益なアドバイスももらえるかもしれません」。

商標登録したフードピクトはNDCグラフィックス(横浜市)のデザイン



神戸で起業した大阪生まれの菊池信孝さん
(神戸市在住、(株)フードピクト代表取締役)





会社での会議は明るい
笑い声が絶えないとか

女性が兵庫で
「働く」「暮らす」を応援

Case Study

管理職でも在宅勤務を活用
休日は家族でアウトドア

11歳になる双子の母、岡本麻紀子さんは、研究開発型外資系製薬企業、日本イーライリリー(株)の開発部門で部長として2つのチームを束ねています。子育てと仕事の両立において道を切り開いてきた彼女は、同社女性社員のロールモデル的存在。部下からは「岡本さんに相談しておけば大丈夫と思える。何事にも動じないで受け入れてくれる上司で、自信と度胸を与えてくれる存在。同じような経験をされているので、共働きの社員にも理解があり、仕事と育児を両立する上でのアドバイスをたくさんいただいている」「社内でのイメージは、ワクワクする新しいことを常に追求している人。イノベーションを推進する部署の長として、常に前向き。信念を持って進もうとする姿勢がすごい」と慕われています。

大阪で生まれ育ち、京都の大学の薬学部を卒業後、兵庫県内の製薬会社に入社。29歳の時、合併で本社が東京に移ることになったのを機に、日本イーライリリーに転職しました。

「東京は通勤ラッシュが大変そうだし、住宅環境も不十分に感じたので、関西にある会社を探しました。自宅の最寄り駅、甲子園から本社のある三宮までは電車通勤。本数も多く、混雑していないので非常に満足しています」

転職後は、糖尿病や精神疾患の領

域で新薬を創るための臨床開発を担当。36歳で出産した時、働く女性を増やしていこうとする会社の方針で、子育て中の社員を対象に試験的に導入された在宅勤務制度を活用。今は週3日ほど自宅で仕事する生活を送っています。

後続の女性たちのためにも
柔軟な働き方を実践

親になってから薬の開発に対する考え方も変わったそうです。「実生活で病院に行ったり、薬に触れる機会も増えて『子どもにはこういう使い方の方がいいな』と母親目線、消費者目線でアイデアを探すようになりました」

管理職に就いたのは子どもたちが2歳になったころ。当時、子育て中の女性管理職はそれほど多くはありませんでした。「自宅でもオフィスでも、上司としての仕事ができることを後続の女性



会議にはスカイプを活用



家族と香美町のハチ北高原で

たちのためにも示したかった」と、周囲の協力を得ながら働き方を工夫し、在宅勤務を続けました。

岡本さんのように柔軟な働き方で成果を出してきた女性たちの積み重ねがあって、同社の多様な働き方のサポートは2018年にさらに拡大。在宅勤務取得の条件も日数も制限がなくなっています。

週末は家族と県内を飛び回ってアウトドアを満喫。「通勤も便利な所なのに、車で1時間ほどの距離に子どもたちと楽しめる自然がたくさんあって、最高の環境！ 近所には小児科や大きなショッピングモールがいくつもあるし、子育てで困ったことが思い浮かばない」と兵庫暮らしを満喫しています。

(2018年9月取材)

